

感染管理教育における多施設合同研修の意義

岩谷佳代子[†]第70回国立病院総合医学会
(平成28年11月11日 於 沖縄)

IRYO Vol. 71 No. 12 (509–512) 2017

要旨

近年、医療機関における感染管理の必要性は高まり、専門性の高い感染対策の実践が求められている中、感染管理を担う職員の育成は施設にとって重要な課題である。国立病院機構九州グループ内では、毎年10分野のエキスパートナース研修がその専門領域を担当した病院で開催されている。国立病院機構嬉野医療センター（当院）では、初回の平成22年度より感染管理分野を担当し、企画・開催に携わっている。本研修は、看護師の役割モデルとなる実践者を育成し、感染対策の質向上を目指すことを目的としている。研修内容は、根拠に基づいた感染管理の基礎内容に加え、院内教育では学ぶ機会の少ない感染症学や微生物学などの専門科目、さらには感染防止技術やアウトブレイク対応など、実践力の向上を目指した教育プログラムとなっている。

多施設合同研修は、「学習環境が確保されている」、「他施設の情報を得ることができる」、「研修生同士が同じテーマに向き合い、相互啓発される」といったメリットがある。しかし、研修生が置かれている環境や課題はさまざまであり、個々の具体的な問題解決まで到達することが困難な可能性もある。研修開催施設は、限られたスケジュールの中で研修生が事前に挙げた課題を把握しそれに合わせた教育と評価を行うことが求められる。今回、当院で行った多施設合同研修の実際を紹介し、多施設合同研修の意義や効果について検討したので報告する。

キーワード 感染管理, 多施設合同研修, エキスパートナース

はじめに

国立病院機構九州グループでは、「脳卒中看護」、「成育医療」、「循環器病看護」、「感染管理」、「認知

症高齢者看護」、「救急看護」、「重症心身障がい児（者）看護」、「がん看護」、「神経・筋難病」、「緩和ケア」の10コースでのエキスパートナース研修がその専門領域を担当した病院で開催されている。国立

国立病院機構嬉野医療センター 感染対策室 [†]看護師

著者連絡先：岩谷佳代子 国立病院機構嬉野医療センター 感染対策室 〒843-0393 佐賀県嬉野市嬉野町大字下宿丙2436

e-mail: iwaya@uresino.go.jp

(平成29年3月2日受付, 平成29年6月16日受理)

The Significance of Multicenter Joint Training in Infection Control Education

Kayoko Iwaya, NHO Ureshino Medical center

(Received Mar. 2, 2017, Accepted Jun. 16, 2017)

Key Words: infection control, significance of other facilities seminar, expert nurse

表1 研修目標に沿った講義内容と方法

研修目標	講義名	時間数 (分)	講義	演習	グループ ワーク
医療関連感染に関する基礎知識を理解できる	標準予防策	140	○	○	
	感染経路別予防策	120	○		
	洗浄・消毒・滅菌	60	○		
	感染症学・微生物学	180	○		
	職業感染防止・感染性廃棄物	90	○		
感染防止技術における科学的根拠が理解できる	デバイス感染対策 (血流感染, 尿路感染, 手術部位感染, 人工呼吸器関連肺炎) 感染対策防止技術演習	180	○	○	
感染管理における組織の役割とその実際が理解できる	委員会活動 各職種の役割	270	○	○ 委員会見学 施設見学	
アウトブレイクの早期発見の対応策について理解できる	アウトブレイク対応	180	○		○
自施設の感染管理上の問題点と課題を明らかにし、自施設の取り組みができる	医療関連感染の課題における対策の検討	205			○

病院機構嬉野医療センター（当院）では、感染管理分野において平成22年度より4日間の研修スケジュールでスタートした。初回の研修開催にあたっては、1年以上前から看護部や事務部の協力を得ながら感染対策室を中心に企画を行った。他施設の看護師を教育することに緊張と責任を感じ、研修施設としての期待を裏切らないように努力している。今回、平成28年度で7回目の開催となり、感染管理教育における多施設合同研修について振り返り、その意義を考える。

研修の目的と対象となる看護師

本研修の目的は、医療関連感染管理における看護の質向上をはかるため、専門的知識・技術を統合し、看護実践の役割モデルになれる看護師を育成することである。原則として国立病院機構内で看護師経験が5年以上かつ感染管理分野で活動経験が1年以上ある者（リンクナースとして活動しているものが望ましい）を対象とし、九州グループ管内28病院から、20名を定員として募集している。これまでの参加人数は平均22名、看護師経験年数は約12年、感染管理経験年数は約2年であった。研修生のおよそ20%（3-4名）は、看護師長、副看護師長が参加している。

研修内容と講師

研修の目標は、1. 医療関連感染に関する基礎知識を理解できる、2. 感染防止技術における科学的根拠が理解できる、3. 感染管理における組織とその実際が理解できる、4. アウトブレイクの早期発見と対応策について理解できる、5. 自施設の感染管理上の問題点と課題を明らかにし、自施設での取り組みができる、としている。それぞれの目標に合わせた教育内容と方法を選択しカリキュラムを構成している。

研修の講師は、長崎大学病院や佐賀大学医学部附属病院の感染制御部の医師をはじめ、国立病院機構内の感染管理認定看護師をお願いしている。主に前半は座学中心となり、後半には演習や当院のリンクナース（リンクスタッフ）委員会見学やグループワークを取り入れている。当院は他施設と比較して感染対策に優れた環境や最新の設備が整っているわけではないが、これまで取り組んだ活動の成果を紹介し研修開催施設としての自覚と責任感を感じることが、当院スタッフに対しても教育の機会となっている。

演習による学習

参加する研修生の感染対策に関する知識、経験年数や施設の特徴などはさまざまであるが、研修生の多くは「他施設の感染対策の実際を知りたい」という目的を持って参加している。すでに院内で教育を受けている内容であっても他施設の取り組みには関心があり、新たな知見に対しては「自施設に戻ったら実践してみよう」という気持ちで臨んでいるものと考えられる。

感染防止技術の項目の一つに手指衛生の演習がある。3M™ クリーントレース™ を用いて、流水とハンドソープによる手洗い前後の手指のアデノシン三リン酸（ATP）を測定する。研修生同士がお互いの手を測定し、“いつも通りの手洗い”をATP値の数値的变化で評価し、可視化する。自分自身の手洗いを数値で評価することで手指衛生の重要性と効果を実感するとともに、可視化された結果を自施設のスタッフ教育の教材にもすることができる。



図1 感染防止技術（手指衛生）の演習風景
手洗い前後の手指のATP測定

不足していた情報の解説時には腑に落ちるといった反応を受ける。研修期間に学んだ専門知識とこれまでの経験を生かし、リンクナースとしての病棟での役割を理解し具体的行動を検討する機会となっている。

事例を用いたグループワーク

アウトブレイク対応については、アウトブレイクを想定した模擬事例をもとに、自分がその病棟のリンクナースとして、どのように初期対応や拡大防止をしていくかをグループ毎に検討している。アウトブレイクの事例における患者情報は最小限で提供されるが、グループワークには感染管理認定看護師がすべての情報を持ち、アドバイザーとして参加する。最初は研修生の経験を生かして事例の全体像把握のための情報を集めてもらう。途中でアウトブレイク時における疫学的な手法についてミニレクチャーを行い、その後は手法に沿って感染経路の特定や具体策について検討する。インフルエンザやノロウイルスの対応を経験している研修生は少なくないため、自身の経験をもとに情報源を持っているアドバイザーから情報を引き出し、アウトブレイクの要因となった背景（感染経路など）をパズルのように組み立てていく。このグループワークでは、疫学的な視点からみた調査法・対応の手法を学び、リンクナースとしてICT（Infection Control Team）など関連部署との連携を図りながらアウトブレイク対応をする実践能力の習得を目的としている。グループメンバーで推理をしていくような感覚で検討された仮説が模擬事例の背景と一致した場合には達成感を感じ、

事前課題に対するグループワーク

事前レポートとして研修前にまとめた各施設や自身における感染管理に関する問題点についてKJ法を用いて改善策を検討する。研修生それぞれが持つ課題は異なるが、「マニュアルが整備されていない」といったハード面や「専門的知識の不足」といったソフト面など、課題の背景には多くの共通点がある。ここでは、課題に対する方法論を自施設へ持ち帰ることが目的ではなく、キーワードとなる要因に対して具体的改善策を導きだしていくことに重点をおいている。このグループワークのねらいは“共有と共感”である。自施設での悩みや不安を声に出し、文章化することでお互いの共通点を確認し、仲間意識を高めることができる。また、ディスカッションを通して、他施設の現状を知ると共に改めて自施設を振り返り、その強みや弱みを再確認する機会となる。それぞれの経験談が飛び交い、共感するあまり軌道修正が必要な場合もあるが、4日間の学びの集大成であり、ここでの具体策案は研修生自身が導き出すものである。

研修の評価

平成28年度の研修生22名に研修終了後アンケート

を実施した。講義の理解度について、「よく理解できた」「理解できた」と回答した研修生が96%を占めていた。微生物学や抗菌薬の名称などの専門的な内容については、知識不足のため難しく感じたという意見があった。また、「グループワークで自己の課題解決の方向性をつかめたか」の問いに対して、「よくできた」が7名(35%)、「できた」が13名(65%)、「あまりできなかった」、「できなかった」はどちらも0名(0%)であった。記述された感想の中には「他の研修生と情報交換ができ、自施設の現状を振り返る機会となった」「学んだ知識を早く自施設に戻って伝えたい」とあった。研修生が発言しやすいグループワーク環境であり、本研修で学んだ専門的知識と他施設の情報を併せることで、課題解決へのやる気と自信につながったのではないかと考える。

多施設合同研修を開催して

本研修を通して自施設へ還元してもらいたいことは、1. 感染対策の「根拠」となる基礎知識、2.

他施設の感染対策に関する情報、3. 感染管理(研修)を通じた仲間作り、4. 感染管理のやりがい(リンクナースとしてのやる気)である。多施設合同研修は、自施設で学んだ知識を深めること、さらに他施設の情報を知ることで自施設の課題をより明確にすることができる。また、研修生同士が課題を共有することで相互啓発され、リンクナースとしての活動意欲の向上が期待できると考える。

本研修が各施設におけるエキスパートナース育成の支援となり、キャリアアップや九州グループ全体の感染管理の質向上につながることを目指し、今後より充実した研修の企画・開催に貢献したい。

〈本論文は第70回国立病院総合医学会シンポジウム「医療関連感染対策としての「教育」を考える」において「エキスパートナースを目指した多施設合同短期研修を通して～手ぶらで自施設には帰せない～」として発表した内容に加筆したものである。〉

著者の利益相反：本論文発表内容に関連して申告なし。